

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 教育学部初等教育コース1年

氏 名: 兒玉 祐里奈

授業科目名	海外異文化体験実習(イスラームの多様性を学ぶ)
研修先(国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私がこの講座に参加したいと思った一番の理由は、中東のイスラム圏の国や人、宗教について、自分の価値観を変えたいと思ったからである。これまで、中東のイスラム圏といえば、実際はそんなことはないとわかっているにもかかわらず、テロや過激派などが連想され、なんとなく怖いイメージがあった。このイメージはイランもあった。しかし、グローバル化が進んでいる現在、様々な文化や宗教を理解することは大切なことであり、私も理解を深めたいと思っていた。そんな中、今回このような講座があると知り、イランを自分の目で見て、現地の人と関わることで、イランや中東のイスラム圏の国や人、宗教を理解することにつながる、絶好の機会なのではないかと思った。</p> <p>実際に中東のイスラム信仰国であるイランに行くとイメージがガラリと変わった。イランは、モスクなどの美しい建物や美味しいご飯、フレンドリーですぐに仲良くなれる人々がいる場所で、滞在中に「怖い」と感じることはなかった。また、親日国で、街を歩くとよくイラン人に話しかけられた。この研修を終えた今は、「怖い国」というイメージが全くなかった。逆にイランに人が集まるためにはどうすればいいのか、イランから怖いイメージをなくすためにはどうすればいいのか、私たちのような外国人から見たイランの改善点はどこなのか、このような疑問が出てきた。また、イランには細かいペイントや刺繍、彫刻などの技術を持っているのに、今現在イランの経済が厳しいために外国に行くことができず、技術を輸出できないと言っている人もいた。そのようなイランの素晴らしい技術を発信できる方法はないのか、ということも考えるようになった。</p> <p>他にも、自分自身の知識不足を感じる場面が多々あった。イランでは、日本の事について興味津々な人が多く、様々な制度や、私がこれまで気にしたことなかった、私たちにとっては当たり前前の事を質問されることが多々あった。私はそれらの質問に対して、うまく答えられないことも多々あって、自分自身、日本について知らないことが多いなと思った。外国に行き、現地の人と関わり、自分が日本代表になるなということを感じた。もっと色々な知識を身につけたり、日本についてもっと知るべきであると思った。</p> <p>また、日本人はイラン人から「学ぼうとする姿勢」を学ぶべきであると思った。イラン人は「なぜ？」という疑問や自分が興味を持ったことをそのままにしていなかった。私たちの場合、疑問があっても「こうなのかな？」という推測で終わらせがちのように感じるが、イラン人は自分が納得できる答え出してから次の疑問を考える姿が印象的であった。私自身もこのようなイラン人の学ぶ姿勢お手本にし、実行していきたいなと思った。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修で新たにできた上記のような疑問や、これまで気にしてこなかった私たちにとっては当たり前前の事について、「なぜ？」という疑問を持ち、それらの疑問点についてじっくり考え、自分なりの納得できる答えを探したいと思う。また、様々な知識を身につける事や、日本の事についてももっと知りたいと思った。これからも、今回のように自分で現地に行き、自分の目で様々なことを見ることを大切にしていきたい。そして、勉強して得た知識、自分の足で色々なところに行き得た経験を生かして、私の故郷である鹿児島県のために何かできることを取り組みたいと思う。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部人文学科多元地域文化コース1年

氏 名: 齊藤 優花

授業科目名	海外異文化体験実習(イスラームの多様性を学ぶ)
研修先(国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修における一番の収穫は、イランという国が、実際の空気と出会った人々の声によって、具体的なひとつの生きた国として自分の中で認識されたことである。この研修中、私は多くのイラン人の方と接する機会があった。その中で感じたことは、次のとおりである。まず一つ目は、イランはおもてなし精神にあふれた国である、ということである。学校訪問や施設訪問、バザールで絨毯の説明を聞くときなど、とにかくあらゆる場面でイラン人は私たちを歓迎し、必ずと言っていいほどお茶とお菓子をふるまってくれた。また、我々がイランでよい時間を過ごすことを心から願い、ガイドや運転手を名乗り出してくれる人々もいた。そして、道を歩けばHi,Hello.と挨拶してくれるし、どこから来たのと話しかけてくれる。おもてなし、という言葉はこれまで、オリンピック招致の際にも用いたことからわかるように、日本の文化として発信してきたというイメージが強い。しかし、日本における外国人への対応を考えると、いくらホテルやレストランのサービスが良くても、国民一人一人レベルのおもてなし精神を比べれば、日本はイランに及ばないのではないだろうかと考えさせられた。二つ目は、イランの国民は、イランの政治に対して冷めた考えを持っている、ということである(あくまで今回私が出会った人々から感じたことではあるが)。バスの運転手さんは、「国内でも貧困で苦しんでいる人々が多くいるのに、イスラームを守るためだと言ってシリアやパレスチナに支援をしている政府にはうんざりだ。だからイランは世界からテロリスト扱いされるんだ。」と言って嘆いていたし、お茶を売る男性はお礼に印刷された指導者を指さして、「今の我々の生活が苦しいのはこいつらのせいだよ」と嘆息していた。ほかにも、テヘラン大学の学生は「今の政府はほかの国々と良い関係を築くのが下手すぎる。」と言っていたし、出会う多くのイラン人が、「政府はだめだけど人はいい国でしょう」と口にする。こんなにも国民の心が政治から離れている、という事実を知り、私は政治体制そのものについて考えなければならぬと思った。日本人もまた、深度や方向は違うかもしれないが、政治に対して関心がなくなってきたのが現状。このような現状を鑑みると、理想の国家体制とは、という疑問も浮上してくる。そして、三つ目に感じたことは、イラン人には向上心がある人が多いにもかかわらず、そのポテンシャルを生かしきれていない、ということである。イランには芸術における技術が高い職人が多く、この技術を日本で生かしたいという人もいたし、日本に行きたいという学生もいた。しかし、経済的な理由や、ビザの取得が厳しいという問題が彼らを阻んでいるのである。経済的な理由の背景には長年続く経済制裁がある。国際関係の問題についても考えなければならぬ。今回の研修では、いろいろなイランの、そして国際社会の問題が見えてきた。しかしこの問題について考えるには、あまりにも自分に知識が備わっていない。このように、考えるためには学ばなければならないから、学ぶためのモチベーションを得られた、というのもひとつ今回の研修の成果であったと考えている。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修では、様々な「考えるべき課題」を得ることができた。例えば、世界のイランへの印象が悪いのはなぜか、理想的な政治体制とはどのようなものか、イランの人々のポテンシャルを生かすにはどうすればよいのか、イランの国際関係はどうしたら改善されるのか、などである。しかし、これらの問題を考えるには、今自分が持ち合わせている知識だけでは不十分であるし、一人で考えても打開策は見つからないであろう。そして、一つの問題について考えるうち、別の問題についての疑問も浮かんでくるだろう。したがって、今後は、その疑問の連鎖を断ち切ることなく勉強を続けていくことを目標とする。そしてもちろん、今回の研修で得た、イランの素晴らしいところ、愛されるべきところを、自分から積極的に発信していきたいと思う。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 教育学部 1年

氏 名: 高田 麻美

授業科目名	海外異文化体験実習 (イスラームの多様性を学ぶ)
研修先 (国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修では、多くのことを学ぶことができたとともに、私自身の不甲斐なさを感じた。学んだことの中で一番印象が強いものとして、「知ることの大切さ」があげられる。以前の、イランのイメージは私の頭の中で、イラクと混じっており、町中を歩く人はほとんどおらず、静かな土地が広がっているというようなものだった。だが、実際に行ってみると私が想像していたものとは全く異なる景色が広がっていた。町中には人があふれ、自動車の普及も進んでおり、みんな普通に生活をしている。今まで私が抱えてきたイメージは何だったのだろうかと思うほどだった。もし、今回の研修で私がイランを訪れていなければ、私の中のイランとはいつまでも危険な国であっただろう。確かに、日本に生きていてイランの情報が入ってくることはめったにない。だからこそ、私たちは想像で終わらせるのではなく、どのような国なのかということを知るべきなのだと思う。さらに、自分のイランに対する印象が変わったからには、発信していくことも重要であると思う。今後、想像だけで決めつけてしまうのではなく、自分から知り自分の中の誤解を解くことが重要であると思った。また、イランで多くの人と関わりを持つ中で自分の不甲斐なさを感じた。イランの学生との交流が多くあったが、どの学生も政治に対して自分の意見をしっかり持ち、また、自分が勉強している分野について学びを自ら深めていた。「どうしてこうなの?」「なんで?」と意見の深いところまでを理解しようとしており、これほどまでに相手の意見を掘り下げる人と初めて出会った。他にも、自分の国では自分のしたいことができないから海外に目を向ける学生が多くおり、その姿勢は私にはないものだと感じた。そこまでして、追い求めるという学生の姿勢はとても印象深かった。日本では、多くの制度や施設が整っており、イランの学生からすればとてもうらやましいようだった。そんなうらやましがられる環境にいるというのに、自分の学びを深めないということは、とてももったいないことであると思い知らされたと同時に、自分の住んでいる国の状況を把握すべきだと感じた。先ほども述べたようにイランでは個人個人が政治について様々ではあるが自分の考えを持っており、その考えを相手に伝えることができていた。もし、私が日本の政治についてイランの学生から質問をされていたら、私は何も発することができなかったのではないかと思う。自分がこれから生きていく社会のことを、たとえ自分自身では変えることができないとしても、考えるべきであると感じた。今回の研修では、毎日が学びの場であり、多くの刺激を受けた。このことを思い出で終わらせるのではなく、何か実行に移していきたいと思う。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今後、私が真っ先にしたいこととして言語の習得がある。イランの学生と関わる中で、英語の大切さを身にしみて感じた。中学校教育から高校教育と長い年月をかけて英語を学んだにもかかわらず、ほとんどが身につけておらず、自分自身に失望するほどだった。他国の人と関わりを持つ中で言語というものはとても重要である。その中でも英語は多くの国で学ばれているものである。これらのことから、今回の研修を期に始める一つのこととして、英語の勉強をすることを挙げる。英語を習得することができた際には、再び海外に訪れ、相手国の人々の考えというものを深くから理解したいと思う。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部2年

氏 名: 鶴丸 莉緒

授業科目名	海外異文化体験実習(イスラームの多様性を学ぶ)
研修先(国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修を通じて得た成果を3つ挙げる。</p> <p>1つ目は、テヘラン、ラシュト、イスファハンの三都市を訪問する中でイランの歴史や文化に触れるとともに、現地の人と交流することでイランの現状について理解できたことだ。研修の前にもイランについて学習したが、お茶、ガラス、絨毯、考古学などさまざまな博物館、モスクや宮殿などの訪問を通じてその歴史の長さと同様多様な広がりを見せた文化を目の当たりにすることでより理解が深められた。また、JICAのイランオフィスや日本大使館で働く人、イランの大学生からイランと日本の関わりや課題について話を伺いイランが抱える負の部分について考え議論することができた。</p> <p>2つ目は、自分が専攻している分野について新しい視点からの考えを得られたことだ。イスファハンでヴァンク教会やゾロアスター神殿を訪れたり、児童養護施設で子どもたちと一緒に遊んだりする機会があった。3箇所とも場所は異なるが、キリスト教のアルメニア人が集うヴァンク教会、イランでも特に少数派であるゾロアスター教の神殿、両親がいないまたは一人親の家庭や貧困で育てられない子どもが生活する施設というようにどれもマイノリティについて考えさせられる場であった。私は地域社会コースに所属し地域社会が抱える課題や地域づくりについて学んでいて、将来は鹿児島に貢献できる仕事に就きたいと考えている。イランでマイノリティの人たちの心のよりどころとなる居場所があり共生している姿を見たことにより、地域について考えていく上で人とのつながりを感じられ感情を共有できる場所の存在が大切であると気づかされた。</p> <p>3つ目は、英語を勉強する意欲が高まったことだ。イランではバザールや地下鉄の中などどこを歩いても年齢や性別に関係なく周りの人から「Where are you from?」と声をかけられ、「Japan」と答えると日本についての知識やイランのおすすめの場所を次から次へと話し始めた。初めのころは観光客だから商売目当てに話しかけてくるのだろうと思っていたが、興味関心や思いやりの心から話しかけてくれる人ばかりだった。後からテヘラン大学の日本語学科の学生に聞いてみると、イランの人たちは外国人の観光客に対してもおもてなしをしたいと思っている人が多いと言っていたので納得した。話しかけられると嬉しかったが、自分が伝えたいことを英語で話せず会話が続かなかったために悔しい思いをした。そのため、今後はこの思いを糧に英語を使うことを中心に勉強していくと決めた。</p> <p>研修に参加して多くの学びとイラン人の大学生とのつながりを得られ、11日間という短い期間であったが有意義なものにすることができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>上記に述べたようにまずは英語の勉強に取り組みたい。英語を使うこと具体的な方法としては、英語で日記を書いたり、鹿児島大学にはGlobal Language SpaceやLOLがあるのでそれを活用して英会話に力を入れたりしようと思う。</p> <p>また、世界のニュースに目を向けようと感じた。現地の人と話をする時には経済や政治について語られることがあったが分からないことばかりだった。イランの人と自分が置かれている環境に違いはあるけれど、自分の生活は日本、そして世界のこととつながっているから分からないといってそのまま過ごすのは良くないと反省した。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 水産学部国際食料資源学特別コース1年

氏 名: 林 綾乃

授業科目名	海外異文化体験実習(イスラームの多様性を学ぶ)
研修先(国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>イランで学んだことのうち最も大きなことは「自分の目で確かめることの大切さ」についてです。イランは「テロがある危ない国で、インフラは整っておらず、ひったくりやスリが多い怖い国」というイメージが、典型的な日本人の持つイランのイメージなのだと思います。確かに、イランではテロが起こったり、スリや置き引きには注意するようによわれます。また、私が滞在していたホテルでは、数時間断水が起きました。</p> <p>しかし、それはイランのほんの一部なのだと思います。イランでテロを起こしたのはアフガニスタン人だったそうです。公衆トイレには手を洗うための石鹸やトイレットペーパーがありました。日本の公衆トイレよりも綺麗でした。ほとんどの道路が綺麗に舗装されていたし、歩道の脇には花や木が植えられていました。リュックを背負っていても、リュックを切り裂くような人はいませんでした。それどころか、道行く人は外国人だとわかると挨拶してくれるし、道が分からなければ丁寧に教えてくれました。様々な所で紅茶を出して下さり、日本人よりもおもてなし精神にあふれていました。これらのことを、ためらうことなく当たり前のようにしてくれるのです。</p> <p>イランについての情報はインターネットで検索してもあまり出てきません。検索して出てくる情報の多くは、イランの危なさや政治ニュースばかりでした。やはり、10日間では分からないことや、インターネットの情報・本でしか分からないことも多くあります。でも、それと同じくらい自分の目で確かめ、考えることも大切だと痛感しました。</p> <p>私は大阪出身ですが、鹿児島については何も知らずに来ました。周りの人にも鹿児島について多く知っている人はいませんでした。鹿児島に来る前に鹿児島について調べましたが、バショウカジキやカンパチのおいしさ、仙巖園の良さや開聞岳の美しさを教えてくれるウェブサイトはありませんでした。だから、鹿児島は桜島と黒豚しかいないところだと思っている大阪の人達に鹿児島のことをもっと知ってもらいたいと思いました。確かに大阪に比べれば不便なこともありますが、私自身が鹿児島に1年ほど住んでみて鹿児島の良さを知ることが出来ました。もっと鹿児島のいろんな所に行ったり、体験して鹿児島の良さを伝えたいです。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>イランについて、あまり知らないまま何となくのイメージで怖い国とってしまい、それが自分の中で簡単には変えられない常識になるのかと思うと、先入観や固定観念というものは恐ろしいと思いました。だから、親切にしてくださったイランのために、イラン研修で感じたことや思った事を周りの人に発信しようと思います。</p> <p>また、イランの多くの人は政治に興味を持ち、身の周りの問題に対してどうにかしたいという思いを持っていました。だから私も何かあれば我が事として捉え、大学や地域をよりよくすることの出来る人になりたいです。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学部農林環境科学科

氏 名: 藤本 光陽

授業科目名	海外異文化体験実習(イスラームの多様性を学ぶ)
研修先(国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私が今回の研修に参加した動機は、「知らないから」でした。中東・イスラームの国というだけで少し怖いようなイメージがありました。これにはISISなどによるテロ報道が絡んでいるのだろうと思いますが、本当はどんな国があるのか自分で調べることもありませんでした。漠然としたイメージの中で興味が湧きました。本当の姿はどんな風なんだろう。自分自身が行くからこそ、リアルを感じ取れるのではないかと。これが今回の全てでした。イランへ行き、見て、感じ、そして触れ合い、実際渡航前には予想だにできなかった数の経験と成長が出来たと確信しています。研修中に訪れた各施設・土地で、文化や辿ってきた歴史の違いに気づかされ、考えさせられました。街中でも気さくに話しかけてくれたり、紅茶とお菓子でおもてなしをしてくれたりする人々の温かさ。彼らは教育や商売・政治などに関する関心が高く、真面目な側面を見せたりもする。都市は大いに発展しており、一方で周辺の村には昔ながらの風景が見て取れる。広大な砂漠の中で生きてきた知恵は確実に伝えられてきている。また美しく荘厳な遺跡は未だ人々の生活の一部であり、同じように宗教は国民一人ひとりのすぐそばに存在していた。さらにペルシャ文字すら美しく、言葉も綺麗なものであった。これらはどれも知らなかったことです。衝撃とともに先入観の恐ろしさを感じました。これらのうち幾つかの事実は、私が持っていた先入観と正反対であったからです。実際に研修を体験し、それを痛感した私は、イランに対して負のイメージを抱いている人へと情報を発信したいと強く感じました。私もそうでしたが、先入観が邪魔をして、本当のイランを見ることができていない人がまだまだ多いのです。訪問したJICA事務所でも伺いましたが、正しい情報の発信が今課題となっているのです。私にとってこれらの気付きは、本研修においてもっとも大きな成果でした。現状を正しく認識すること、そして情報発信を適切に継続させることが重要だと思われまます。これは全ての分野に共通する気づきであるとともに、そのためには行動することが最も重要視されるべきだと考えるきっかけになりました。本研修内容のみならず、自身が興味のあるあらゆる分野について知見を深め、発信して行くモチベーションが本研修の成果だと信じています。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今後はひたすらに行動することが私の目標です。それは何かを学ぶことであったり、今回のように実際に見に行ってみる事です。そして次の段階として「発信」したいと考えています。SNSによって多くの人と繋がっているこの時代だからこそできることを、若者の視点を交えて実行して行きたいのです。例えばECサイトを立ち上げ、イランの伝統工芸品や文字を柄にした食器を販売するなど、実物を提供する発信のカたちも考慮に入れています。従来のやり方にプラスして、何か自分にできることを具体的に考えていくつもりです。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部・1年

氏 名: 堀江 裕介

授業科目名	海外異文化体験実習(イスラームの多様性を学ぶ)
研修先(国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修の成果は主に、異文化を正しく理解するには実際に現地を訪れることが重要であると学んだことである。</p> <p>研修以前の私にとってイランやイスラームはなじみの深いものではなく、イランを含むイスラーム地域に対して、日本からの一方的な視点で、ニュースで報道されている政治的な側面でしか捉えることができていなかった。また、中東、イスラームと聞くと、テロや紛争、内戦を連想し、少々怖いというイメージを抱いていた。しかし、研修を通してイラン、イスラームに対する理解が深まりイメージが大きく変わった。特にイメージが大きく変わったきっかけは次の二つである。一つは、イランの人々に接し、彼らがどのような人であるのかを理解できたことである。彼らは非常に友好的であり初対面の私達に対しても自分の考えや信条を話してくれた。日本では、初対面の人に積極的に話しかけ、自身の内面まで述べる人は少ないため、非常に新鮮に感じられた。また、私達に心を開き信頼する姿には深く感動した。自分を理解してもらうためには、自ら心を開き相手に理解してもらう姿勢を持つことが大切だと感じた。二つ目は、イスラームが社会生活においてどのように働いているのか知ることができたことである。イスラームの教えは、日本でも学校でも習うが、実社会でどう溶け込んでいるのかについては理解し得なかった。しかし、研修を通してイランの人々にとってイスラームは当たり前で、人々の習慣や公共交通機関、教育から政治に至るまで社会システムにおいて様々な場面で機能していることを感じることもできた。また、中でもイスラームの喜捨の文化には深く感銘を受けた。施設や道路脇にはサダカ箱と呼ばれるいわゆる募金箱のようなものが設置しており、学校の建設や児童養護施設の運営など寄付によって行われていた。特に児童養護施設では、親を亡くしたなど様々な境遇の子供たちに居場所を提供し、深い愛情をもって接しており、子供たちが皆明るかったのには感動した。他人を思いやり、自分のものを人のために使うという考えは、本当に素晴らしいことであり、見習っていこうと思った。</p> <p>私たちは、馴染みのない異文化に対して、表面的な部分や勝手なイメージで判断してしまいがちである。それによって誤った認識をし、自分と相手に壁を作り、場合によっては対立をもたらすことも考えられる。文化には多様な側面があり、理解するには多様なアプローチが必要である。また、文化を構築している土台にあるのはその地に住む人々であり、風習や宗教であると思う。異文化を理解するには現地に足を運び、人、風習、文化を自分で体感することが重要であると学んだ。今回の研修では上記のことの他に多くのことを学んだが、まだ知らないことも多々あるはずである。自分の見たものがすべてではないということをはっきり心に留めておきたい。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修を通して完全とは言えないが、イランやイスラームに関して多くのことを学んだ。私の周りにはイランやイスラームに対して誤った認識をしている人が多く存在している。その様な人たちに実際自分が体感したことを伝え、誤解を解いていくように努めたい。また、鹿児島には私とは文化の異なる多くの人々が住んでおり、彼らに対して誤った認識をしている部分があると思う。彼らと積極的に交流し、お互いを知ることによって文化を理解し合い、良い関係を築いていきたいと思う。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 水産学部・1年

氏 名: 村下 瑞希

授業科目名	海外異文化体験実習(イスラームの多様性を学ぶ)
研修先(国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回のイラン海外研修を通じて、実際に自分の目で見てみることの大切さを改めて知ることが出来たことが、自分の中でこの研修に参加できた一番の意味になるのではないかと思います。この研修に行くまでは、イランという国についての知識もほとんどなく、どんな国であるのかなど未知数でしたが、実際に行って、体験し、その国の文化に少しでも触れてみることで来る前とは全く違う、イランの国や人々の様子など様々なことを目にする事が出来ました。その中でイランと日本との違いも見つけることが出来たし、それぞれの良いところや問題だと思われる点も見つけ、いろいろな場面で考えさせられるきっかけになりました。特にこの海外研修を終えて疑問に思ったことは、日本の多くの人々のイランに対する偏ったイメージです。確かに研修中も何度か注意点はあったけれど、どの国の人にも言えるようにその国の全員が悪いことはなく、実際に会ったイランの人々も良い人たちばかりでした。しかし、日本では危険なところという認識が強く、これはなぜなのかを考えるきっかけになるとともに、知らない、分からないということの怖さを改めて感じました。また、今回の研修では、博物館やモスク、教会などに訪れる機会も多くあり、この国を歴史的にも知ることが出来たし、日本とは異なった宗教という面でも知ることが出来ました。特に日本ではあまり知られていないアルメニア人の虐殺は衝撃的なことであつたし、その事実があつたことを認める国もある中で、認めていない国もあり、それには政治など国同士との関係も関わっていて、難しいものだなと思いました。他にもこの研修では、カスピ海や砂漠も訪れ、身近にはない自然とふれあえたことが一生の思い出となりました。また、バザールなどでは自分で値段を交渉する機会もあり、どれくらいの値段ならばいけるのかを考えるのは日本ではないことで楽しくもあり、難しくもありました。研修中に人と関わる機会もたくさんありましたが、いつも自分たちを楽しませようとしてくれたり、おもてなしして下さったりしてとてもいい人たちばかりだったし、話しかけてくれる人も多く、日本では外国人に自ら話しかける人は少ないので、そこにも驚いたし、そのフレンドリーさはいいなと思いました。また、大学生と交流した時には、交流した大学生の意欲のすごさに驚かされたし、その関心の分野が日本とイランの違いについてなどに留まらず、政治や文化にも及んでいたことにも驚かされ、もっと自分も頑張らないといけないと思いました。このようにイラン海外研修に行ったことでの発見や自分の中で見直すべき点も見つけることが出来て、今回の研修は学べたことの多い良い機会となりました。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修での大学生との交流で、英語を使って話す機会がありましたが、英語力が足りず、難しい議論をするまでには至りませんでした。言語を使うだけでなく、なんとか伝えようとするのも大切であると思いますが、やはり言語力はこれからも必要となってくるものであろうからまずは言語の勉強を頑張りたいなと思いました。また、イランとはどんな国であつたかを身近な人からでいいので話して、少しでもイランの怖いところだというイメージを改善出来ればいいなと思えます。鹿児島でも国際的な交流の場が増えればいいなと思うし、それらに自分も参加したり、さらにはその国について学んだり、今回のように実際にその国に行ってみたりすることで自分の中のイメージだけで判断してしまわないようにしていきたいです。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理学部生命化学科・3年

氏 名: 山床 太一

授業科目名	海外異文化体験実習 (イスラームの多様性を学ぶ)
研修先 (国・地域) 滞在地	イスファハン医科大学 他 (イラン・ラシュト、イスファハン、テヘラン)
研修期間	平成31年2月11日～平成31年2月22日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私は、この研修を通して多くのことを学ぶことができました。その中でも、日本とイランの気候の違いとイランの宗教について深く学ぶことができました。</p> <p>まず、気候についてです。イランは、日本と比べると乾燥していますが、暑くはありません。イラン高原に位置していて、標高が高いため、鹿児島と同じぐらいの気温でした。また、地域によっては乾燥の程度は異なります。北部のラシュトやラムサールなどは湿地帯が広がっており湿潤で、米や茶の生産が盛んです。イランの首都であるテヘランやイスファハーンなどは乾燥しています。今回の研修ではイランの古い町並みが残るザバーレという町に行きました。そこではレンガと泥と糞を混ぜた土壁でできた町が広がっていました。雨が全く降らないことから天井に日差しを取り込むための穴が開いていました。また、実際にカナートを見ることができ、町の中には地下深くに水をためておくための貯水施設もありました。日本で集落ができる条件は、平地であることで水は大きな問題にはなりません。しかし、イランは逆で平地は広がっていますが、水がありません。イランで集落ができる条件は水を山から運んでくることです。日本とイランの気候は逆ですが、自然の脅威に対して人々が協力して乗り切るという面は、同じだと感じました。</p> <p>次に宗教についてです。日本で生活しているとあまり宗教のことを考える機会がありません。しかし、イランでは国教がイスラム教シーア派と決まっており、宗教と日々の生活が切っても切れない関係にあります。今回の研修では、イスラム教のモスクだけでなく、イランで少数派宗教として認められているアルメニア正教の教会やゾロアスター教の教会も見学してきました。それぞれに異なる特徴がありました。イスラム教のモスクには、文字を使った装飾がいたるところにありました。イスラム教の基本がコーランの朗読にあるということに関係しているのではないかと推測しました。アルメニア正教は、古い系譜のキリスト教です。教会の中には、聖書のあるシーンを描いた人物画が全ての面にありました。ゾロアスター教は、火を崇拝していることから拝火教とも言われています。その教会はとても質素なつくりで火と絵が一つあるだけでした。アルメニア正教の教会の後に行ったのでその落差にはとても驚きました。日本の仏教や神道についても調べ比較してみたいと思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>近年、日本を訪れる観光客は右肩上がりに増えています。鹿児島でも街中で外国人を見かけることが普通のことになりました。今回の研修で私は、イスラム教シーア派、アルメニア正教、ゾロアスター教の3つの宗教に触れることができました。そして、イランの風土や文化に触れることができました。率直に思うことは、もっと英語ができれば説明や大学生同士の交流を深めることができたことです。買い物や簡単な意思疎通はできましたが、やはり共通の言語としての英語の力を痛感しました。単語や文法だけでなく、英語を使う機会を自分なりに作ってみようと思います。</p>	